

天 空 文 庫

HOTEL OKRA へようこそ 2

月夜野せつな 著



天 空 社 版

1059BSR

目次

-
- 一 本当は大事だった言葉
 - 二 真田主従について
 - 三 伊達主従について
 - 四 蒼紅主従について
 - 五 よもやま話

一
本当は大事だった言葉

「――願ひ？」

「そ。旦那にだつて一つぐらいあるだろ？ 無事お館様のご上洛が成りますようにとかさ」

「お館様のご上洛は必ずや成し遂げられる未来の事実！ 俺の願うまでもないことだ！」

「あーはいはいそうですねそうでした俺様が間違つてましたーつと。……んじやさ、もつと強くなりたひ！ とか、独眼竜の旦那と決着を！ とかはどうなのさ？」

「確かにそれは俺の望みとすることだが……目標とすることと、願ひとすることは別物であらう。神に願うなど、己の力が足りぬ言い訳であるぞ！」

「あー、そうなる？ うちの旦那は頭が固いなあ。こんなのお遊びみたいなモンなんだから、もつと氣樂に考えろつて」

「……団子か？」

「……そんなの、俺様があとで作つてあげますよ」

「まことかつ！」

「だっからどーしてそこでそんなに喜ぶかなあ!? アンタ本ッ当にお館様と甘味のことしか興味ないのか！」

「……本当さあ、なっんもないの？ そんなつまらない人間だったのかよ旦那」

「う、うるさい！ 居おるかも解らぬ神になど何も望まぬわ」

「たとえ話なんだから、どんな実現不可能な願いでも良いんだぜ？」

「……ならば——ならば、もしお前が忍でなくなったら」

「え、なに、解雇されちまうの俺様」

「誰がするか！ もしもの話だ、来世の話と言っても良い」

「来世、ねえ。神様も信じないアンタがそんなことを言うか」

「言う。もし来世があったとして、またお前と巡り会えたとしたら、かような晴れた日に、

ともに茶を飲みたい。縁側に並び座り、茶を飲み、互いに団子をつまみながら話したい」

「……わざわざ神様に祈るのがそれ？ 実現不可能とか……今と何が違うんだよ」

「その時のお前は、かように主従のしがらみに拘るお前ではないだろう？ ——来世では、

ただの一人の友として、俺の傍にあつて欲しいのだ」

湯飲みは一つ、団子は三本。斜め後ろへ一步と半分隔たれた距離は、今生の限りは埋まり

得ぬのだと知っている。

武田に暗雲の陰もなく、天下の統一が輝かしい夢の形をしていた、そんな頃の話だ。

(中略)

ついに佐助が我が家に来るといふその日、幸村は上田の屋敷で今か今かと信玄の帰りを待っていた。

「帰ったぞ、幸村あ！」

「おじやましませう」

待ちわびた声に、全速力で玄関に向かう。既に大方の荷は運び込んである。

幼い佐助は、小さなキャリーケース一つとともにやってきた。

信玄に連れられて玄関にぽつんと佇む様子は、どうにも所在なさげに見えた。

幸村は笑みを浮かべて佐助を出迎える。

「待っておったぞ、佐助！」

「……どうもー、オセワナリマス」

佐助はへら、とあからさまな愛想笑いを浮かべた。

「ああ。幾久しく、宜しく頼む」

幸村は頷いて、佐助を居間へと案内した。

不安と期待がないまぜになった不思議な高揚感が胸を染めた。果たして今生において、佐助とうまく友情を育めるだろうか。

長期戦となることは覚悟している。少しでも信を置いてもらえるよう誠実に振る舞おう。

「えーっと、まあもうご存じでしょうけど。改めて、猿飛佐助っていいです。今日からお世話になります」

佐助はそう言つて、ぺこりと頭を下げた。

お館様が利用されたのは里親制度、というものらしい。戸籍上は猿飛のままなのだとか。それでも家族となったことには違いない。

「うむ。今日からおぬしにとつて此処が帰る家、儂らが家族じゃ。未だ慣れぬであろうが、少しずつ馴染んでくれると嬉しい」

「へへっ、今さら畏まられるのもなあんか変な感じだね。えーっと、武田サン？　なんて呼んだらいいのか分かんねえな。まあ、とりあえず、よろしく？」

「佐助、お館様はお前の父上となるお方だぞ。そのように他人行儀に呼ばずとも……」

「オヤカタサマ？」

こてん、と佐助が首を傾げる。あ、と己の失言を訂正する前に佐助がおかしそうに笑う。

「面白いあだ名だね、時代劇みたい。俺様もそう呼ばっかなー。イイです？」

「うむ、好きに呼ぶと良い」

はあい、と返事をした佐助は、次いでくると視線をこちらに向ける。

「アンタは、えーつと、何だっけ？」

「っ！ ゆ、幸村だ」

「ふーん、ゆきむら……」

確かめるように呟かれた己が名に、どきりと心臓が脈打つ。佐助にこの名を呼ばれるのは、随分と久しぶりだ。

「お館様の息子だから……ぼっちゃんとか？」

「な、何故そうなる！」

前生含めても一度とて呼ばれたことのない呼び名に、思わず声を上げた。

(中略)

——ドクン。

その男と目が合った瞬間、政宗の心臓が跳ねあがった。

真っ直ぐに射貫く眼差しが、体の内側から焼き尽くすような高揚感呼び起こす。

灼熱の炎を人の容に落とし込んだら、きつとこんな形をしているのだろう。今生一度だって感じたことのない懐かしい渴き。嗚呼、コイツは！

「なっ——んで、アンタがここに……真田幸村ア!!」

呼び覚まされた戦国の竜が吼えた。

対する幸村は突如として激昂した政宗にビクリと肩を跳ねさせると、小さく両手を上げて首を傾げる。

「ええ、と……申し訳ございませぬ。貴殿と某とは、以前に何処かでお会いしたことがありますでしょうか？」

「どっかでしたと？ ふざけんな！ アンタと俺は……ッ！」

「四限はテスト範囲発表だぞ！」

家康からのライン。前世から世話になりっぱなしだななんて思いながらスマホをしまい、再び自転車漕ぎ出す。

寝坊したものの、このまま行けば四限には余裕で間に合うだろう。

大学近くの駅前の横断歩道、ふと見ると前方の大学生から緑色の何かが落ちた。

サイズからして定期入れか？　ありや困るだろうと思い、定期入れを拾い、自転車で追いかける。

「おい！　そのアンタ！　これ、落としたぞ！」

肩を軽く叩いて少し先で止まる。振り向いて驚いた。片目は今までで一番見開かれた。追いかけた大学生、それはアイツによく似た、いや、間違いなく毛利元就だった。

どうする？ いや、声かけちまったし、逃げるわけにも行かねえだろ！ いやいや、そもそも毛利が前世のこと覚えてねえかもしれないねえし、ここは普通に知らない人のフリをしよう！なんて動揺している間に毛利はこちらに来ていた。

「あ、え、こ、これ、お、落としたぜ」

と定期入れを渡す。定期券には『モウリ モトナリ』と書かれていて、他人だという淡い期待は打ち破られた。毛利は受けとりながらこちらを見て、

「ありがとう……もしかして、長曾我部か？」

と聞いてきた。

俺の他人のフリ作戦は終わった……俺は頷くしかなかった。相手が記憶持ちとなればいくら誤魔化しても無駄だ。

しかし、よりにもよって毛利。これは家康のように穏便な再会とはいかないだろう。どうする？ やっぱ、自転車で逃げるか？ などと思考を巡らせていると毛利は頷いた俺に対し、「やっぱり、長曾我部か！ 前世ぶりだな！」

とにこやかに笑いかけてきた。正直に言う。寒気がした。え、なにこれ？ 罨？